



タイムラグを考える

大阪大学大学院理学研究科 稲葉 章



熱測定を行っている時、平衡に到達するまで、あるいは安定化の過程で長い緩和に出くわすことがある。得られた結果がっかりしたとき、待つために要した壮大な無駄を後悔することになる。一方、有益な情報が得られたとき、待つ我慢の重要さが身にしみるに違いない。ここでは、いろいろな時間の遅れ（タイムラグ）について考えてみたい。

日本出身の4人が2008年のノーベル物理学賞、化学賞に決まった。これをもってノーベル賞30人計画（21世紀前半に30人程度の受賞者を輩出するという数値目標）の順調な推移とする論調はさすがに見られない。受賞者の仕事を見れば分かるが、大きな成果は30～40歳代に精力的に行われた研究で得られたものが圧倒的に多く、受賞まで長いタイムラグがあるからだ。具体的には今回の場合、当時のアメリカの環境が研究に如何に快適であったか、あるいは素粒子物理という特異な分野で自由な議論を闊かせる研究室がその当時の日本にはあった、という証ししか残らない。今となっては悪名高いゆとり教育や効率一辺倒の現在の教育、大学における昨今の競争的な研究至上主義の結果はずっと先でしか現れない。しかし大方が指摘するように、残念ながらプラスの要素は一向に見えない。

大学では学生の質が落ちたと言われて久しい。その頃の学生はすでに教員になっているから当然、いまは教える側の質が落ちているはずである。しかし、依然として学生の質が落ちたと声高に言われる。これはタイムラグの恐ろしいところで、時が時間軸の一方方向にしか流れない怖さでもある。目に見えないこの負のスパイラルからどう脱出できるだろうか。大学ではファカルティ・デベロップメント（FD）で教員の再教育が企画されるが、事はそう簡単ではない。同じく大学で問題となっているポストクの就職問題はどうか。何十年前前にオーバードクター（博士号を取得したが就職がない、もしくは就職がないので博士号を取らずに在籍する）問題がクローズアップされた。当時の日本にポストク制度がなかったからだが、その制度をつくったとき、すでに現在のポストク就職問題が予想できたはずである。タイムラグを、単に問題先送りに使えば確実にこのような結果が現れる。

社会問題となると、タイムラグの悲劇は枚挙に遑がない。

いわゆる消えた年金問題は正しくそうであり、問題が発覚するまで長年のあいだ表に出ることはなかった。しかし、この間に乱れた情報のエントロピーを元の状態に戻すには、とてつもないエネルギーを費やさねばならない。問題が大きければ大きいほど、その慣性は大きく、正常化の対応には時間がかかる。数十年前の公害問題にしてもそうである。それを克服する技術は当時すでにあった、もしくは比較的短時間で技術開発が行われたのだが、われわれ自身の意識改革に最も時間を要したのではないだろうか。この教訓が発展途上国で生かされれば、過去の経験は貴重なものであったと言えるが、昨今の中国の食品問題や環境問題を例に挙げるまでもなく、人とはこうも同じ繰り返しをするものであろうか。

個人レベルの意思決定の先延ばし（心理学でいう「モラトリアム」）も、はじめは若者から、いまでは次第に高齢化している。組織としての判断の先延ばしは往々にして命取りになるが、個人レベルでも問題は大きい。平均寿命が長くなった分、許される現象と楽観的な見方もできるが、それにしても若者のエネルギーを無駄にするのは如何にも惜しい。タイムラグにも制御可能なものがあり、その場合には人間の知恵が働く余地が十分あると思うのだが、そうもうまくはいかないようだ。長いタイムラグが必須なもののほど、正しく迅速な決定が要求され、扱いは細心の注意が必要と思うのだが。

タイムラグは一方で、将来に対する希望や夢に繋がる要素をもち、本来は明るく楽しい材料でもある。周到に練られた戦略をもって未来に布石し、将来に投資することをいま行う。それには洞察力や想像力に加え決断する勇気が必要である。取り敢えず今日・明日さえ生き繋げばよいという考えをちょっと横に置き、いっそのこと、タイムラグの長いものから手掛けるという“あまのじゃく”は案外、いろいろな場面で功を奏しそうな気がする。そのような考えや試みが、いまの厳しい世の中で押しつぶされてしまわないことが大事ではないだろうか。